武蔵大学FD関連資料

1.会議記録など（委員名簿、FD 委員会議題、FD 実施委員会議題）

【2011 年度　FD 委員会】

委員長　清水敦（学長）

所属	役職	氏名
人文学部教授	FD 実施委員長	和井田 清司
経済学部教授	学部長	板垣 博
人文学部教授	学部長	光野 正幸
社会学部教授	学部長	栗田 宣義
社会学部教授	教務部長	山嵜 哲哉

オブザーバー：企画課

FD 委員会議題

■平成 23 年度第 1 回 FD 委員会議題
［日時］平成 23 年 6 月 2 日（木）12 時 10 分～
［場所］学長室

〈審議事項〉
A-1　「学生による授業評価アンケート」取扱内規
A-2　自由記述のフィルタリングに関して
A-3　初任教員の研修会案内
A-4　その他

〈報告事項〉
B-1　2011 年度 FD 実施委員会方針・体制等
B-2　7/7 FD 研修会の準備状況
B-3　その他

■平成 23 年度第 2 回 FD 委員会議題
［日時］平成 24 年 3 月 29 日(木)14 時 40 分～
［場所］8 号館 88-H 会議室

〈審議事項〉
A-1　FD 活動の Web 公表の件
A-2　授業評価アンケートの設備関連回答一覧の件
A-3　その他

〈報告事項〉
B-1　FD 調査員からの調査報告について
B-2　その他

【2011 年度 FD 実施委員会】

FD 実施委員長　和井田清司（人文学部教授）

所属	氏名
経済学部教授	河合 康夫
経済学部教授（経済学研究科兼務）	松島 桂樹
人文学部教授（人文科学研究科）	八木 清治
人文学部教授	土屋 武久
人文学部准教授	田中 愛
社会学部教授	中橋 雄
社会学部准教授	菊地 英明

オブザーバー：企画課

FD 実施委員会議題

■平成 23 年度第 1 回 FD 実施委員会議事録

［日時］平成 23 年 5 月 5 日（木）14 時 40 分～

［場所］8 号館 81－D 会議室

〈協議事項〉

A-1　2011 年度 FD 実施委員会活動方針（案）

(1) 授業評価アンケート実施の改善策

(2) FD 研修会の充実策

(3) FD 活動の多角的展開にむけた施策

A-2　2011 年度 FD 実施委員会役割分担（案）

A-3　2011 年度 FD 実施委員会活動日程（案）

A-4　その他

〈報告事項〉

B-1　大学協議会 FD 関連議事通過

B-2　アンケート結果閲覧活用規程 WG の組織と活動状況

B-3　2010 年度 FD 活動報告書（確認）

B-4　その他

■平成 23 年度第 2 回 FD 実施委員会

［日時］平成 23 年 5 月 26 日(木)16 時 20 分～

［場所］8 号館 81－D 会議室

〈協議事項〉

A-1　前期授業評価アンケート実施の具体案

A-2　FD 研修会の具体案

A-3　その他

〈報告事項〉
B-1　アンケート結果閲覧活用規程
B-2　新人教員への研修会案内
B-3　事務組織再編
B-4　2010 年度 FD 活動報告書
B-5　その他

■平成 23 年度第 3 回 FD 実施委員会議題
［日時］平成 23 年 6 月 23 日(木)14 時 40 分～
［場所］8 号館 81-D 会議室

〈協議事項〉
A-1　授業評価アンケート実施の具体化
A-2　FD 研修会の具体化(7/7 の準備、11/17 の内容)
A-3　その他

〈報告事項〉
B-1　6/2 FD 委員会報告
B-2　新人研修会の案内
B-3　「学生による授業評価アンケート」取扱内規の報告
B-4　その他

■平成 23 年度第 4 回 FD 実施委員会議題
［日時］平成 23 年 10 月 13 日(木)14 時 40 分～
［場所］8 号館 81-D 会議室

〈協議事項〉
A-1　11 月 17 日 FD 研修会の具体化（演題、告知、当日資料、当日分担等）
A-2　授業評価アンケートの検討（後期の実施、分析内容）
A-3　授業評価アンケートの活かし方（学生へのリプライ、分析結果を受けた改善）
A-4　その他

〈報告事項〉
B-1　FD 調査員について
B-2　学生 FD（学友会）について
B-3　大学院での取り組みについて
B-4　その他

■平成 23 年度 第 5 回 FD 実施委員会議題
［日時］平成 23 年 11 月 10 日(木)14 時 40 分～
［場所］8 号館 81-D 会議室

〈協議事項〉

A-1　11/17FD 研修会の最終調整

A-2　後期授業評価アンケート対象科目の検討

A-3　授業評価アンケートの検討（分析内容、分析結果を受けた改善、学生へのリプライ方法（3S または新システムの利用））

A-4　FD 活動報告書の内容と体制

A-5　その他

〈報告事項〉

B-1　FD 調査員について

B-2　その他

■平成 23 年度第 6 回 FD 実施委員会議題

［日時］平成 24 年 1 月 26 日(木)14 時 40 分～

［場所］8 号館 81-D 会議室

〈協議事項〉

A-1　3/13FD 研修会の具体化（内容、告知、当日資料、当日分担、教室レイアウト等）

A-2　FD 活動報告書の内容

A-3　その他

〈報告事項〉

B-1　平成 23 年度事業報告書及び平成 24 年度事業計画書について

B-2　年次分析のスケジュールについて

B-3　大学院生との懇談会の報告

B-4　FD 調査員からの報告

B-5　その他

■平成 23 年度第 7 回 FD 実施委員会議題

［日時］平成 24 年 3 月 7 日(水)14 時 40 分～

［場所］8 号館 81-D 会議室

〈協議事項〉

A-1　3/13FD 研修会の件

A-2　授業評価アンケートの設備関連回答一覧の件

A-3　FD 活動の Web 公表の件

A-4　その他

〈報告事項〉

B-1　設置計画履行状況等調査の結果等について（平成 23 年度）について

B-2　その他

2.FD 調査員報告（他大学訪問ほか）

日本の大学のFD

周知の2008年大学FD義務化以前に、2005年の段階で文部科学省の調査によると、全体の81%に当たる575大学が既にFDに相当するものを実施していたことになる。各大学のFD組織は、学部長、教務部課長、各施設・センター長等からなるFD委員会が組織され、教育開発専門スタッフ、FD学術調査員または教育を支援するセクション設置やそれにともなうティーチング・アシスタント、教育カウンセラーなどの配置による動きが年々拡大・充実してきている。FD組織形態を大別すると下記のようになる。

FD組織スタイル	特徴
a)教育センター型	全学的組織、多様なFDチャンネルや連携機能を持つ
b)副学長級をトップとした教育改善組織	全学的かつ機動力がある
c)FD学術調査員など専門職員を配置	教員-事務間の中間的業務を補完。情報収集力高い
d)教務事務系主導型	授業アンケート中心。非全学的傾向
e)その他	消極的なもの、教員ごとの対応レベル

さて、そのFDコンテンツを大別すると

1.授業評価アンケート

2.新人教員研修や事例紹介などの研修、導入(初年次)教育などのワークショップ

3.公式ホームページに情報開示

4.教育事例集などの発行

に集約されているのが現状で、特に1、2に関しては、何らかの形でほぼ全ての大学は実施している。また、よく上げられるFD活動のキーワードは下記のようなものである。

項目	課題
授業評価アンケート	リプライ、フィードバック方法
FD教職員研修	内容、対象、低参加率、発展性
教育支援スタッフ	FD専門職員、TDなどの活用
SD	FDとの包括的な連携
初年次教育	ゼミなどと連携カリキュラム、教材開発、リメディアル教育など
キャリア支援	連携プログラム
学生FD	対象と内容など
広報など	情報開示、連携機能
FD ツール	教材開発、分析ツールなど

しかしながら、これまで「FDの定義と方向性」が広範囲・複合領域に関わるものであるため、そして教育を絶対的な数値で可視化する手法が確立していないため、さらには大学内において専属のスタッフ・部署が固定されていないケースが多く、その取り組みは大学ごとに手探りで模索しているのが現状と言えよう。

その結果、学生や外部を取り入れた多様な教育開発と改善に取り組んでいる“先進的な大学”と、大学認証評価用のためともいえるような学生アンケートと研修の実施のみの“後進的な大学”の二極化が近年顕著になっている。教育の質や大学の在り方が真剣に問われるようになり、既存の対応やスピードでは、この難局を乗り越えられない危機感を感じる。日本の全国的なFDの取り組みから、幾年経過し黎明期を過ぎ、次なるキーワードは各大学“独自”のFD（教育改善と開発）の構築へと展開している。その根幹となる教育評価および改善機関のファカルティ・ディベロップメントから、その枠にとらわれない発展した教育改善・開発は益々重要になってくるであろう。

そこで次に武蔵大学のFD基本指針にのっとった本年度の調査内容の一部をここに紹介する（詳細は、『武蔵大学FD調査研究レポート2011』-内部資料-に記す）。

武蔵大学のカリキュラムの特色とFD

一般的に、大学の規模、歴史、立地条件・地域性、施設、学生数、教職員数、学部及び大学院の構成、カリキュラムと履修システム、偏差値と入試形態、高校までの学習経験と教育指針の影響、カリキュラムなどの要因が複雑に絡み合って、大学ごとの校風が形成され、大学独自の教育の特色とその問題点が発生するものである。FDは本来、それら包括的かつ客観的に評価する機能が求められ、次に強みを伸ばし弱みを補完する改善点の抽出と改善システムの開発能力が求められる（PDCAサイクル対応型）。

教育改善と開発に関して、他校の先進的とされる事例を武蔵大学用にチューニングせずに取り入れても、高い効果はあまり期待できない。新規なFD活動の流用は、自校に即した教育カリキュラムに何らかの形で加工していくプロセスが不可避であり、成果が出るまでには時間を要する。難題である『教育の質』の検証においては、今日では様々な分析手法が試みられているが、自校に合ったFDポリシーを目指すには、具体的に個々の「カリキュラムポリシー」の認知があらためて重要となる。すなわち教育内容として『何を伝え』『何が伝わったか』このマッチングを検証・評価・改善システムを建学の理念に則した手法で実践していくことが、その大学に最も適合した合理的な教育改善として具体的な輪郭が見えてくるからである。現在の自己申告型の「学習環境アンケート」では、検証・抽出が難しい。

武蔵大学は、3学部約4500名のスケールメリットを活かした教育カリキュラムおよび学生ケアの実績の歴史が古い。マンモス校と異なり、アンケート等に頼らなくても個々の学習状況や悩みなどに早期に対応できるメリットがある。退学率、転科率の低さはそういった満足度の指標の一つといえ、また「奨学生課題レポート」などの項目にある、自校の期待を満たす内容として多くの学生が具体的に少数精鋭の校風やゼミカリキュラムの良さを指摘している。

FDには「ゼミ型」のカリキュラムが最適であると指摘する研究者や専門書が多数出版されており、今日ではゼミを早期に取り入れたり、学部学科間の縦断的な履修を可能にするカリキュラムが他校でも急増してきた。武蔵大学の強みである「ゼミ」は他校との差別化は何か？そして、そのゼミの教育的な内容をどのように評価し、改善・発展させていくのか、これらが次の段階の課題となっている。

教育情報の孤立化の回避・他校の取り組み

大学の教育改善・開発が活発化し、FD の情報交流や連携が加速する中、武蔵大学には外部 FD に関する情報収集機関、およびその情報還元機能が無い。対外的だけでなく、内部 FD（SD 含む）に関しても、個別に優れた FD（SD）に相当するものが多数あるにもかかわらず、全学的な取り組みや情報共有が脆弱である。その課題を踏まえて、FD 基本指針にも上げられている「5 大学との連携」項目として、訪問した結果を次に述べる。

5大学とは親交の歴史の深さから、相互の校風などを熟知しており、5大学以外の訪問に比べると、連携や情報交換に関して担当者レベルでは前向きな回答を得ることができた。武蔵大学のFD課題の一つである他校との連携や情報交換などがこれまで脆弱であるため、当初のFD基本指針の項目にあるように、5大学との交流は、頻度はさておきFDに関する実施内容や実務レベルなどの問題点、さらには教育改善のトレンドについて早期対処できる利点があるため積極的なFD情報交換の場の推進を推奨したい。昨年度、和井田FD実施委員長らが、訪問したいわゆるFD先進校とは異なり、日本を代表するような先進的取り組みは多くはないものの、これまでの試行錯誤の結果を積み上げてFDの範疇を拡大し、自分の大学に合った教育改善と組織づくりをそれぞれ全学的な取り組みとして堅実に成果を出そうとしている。例えば、学習院大学、甲南大学に関しては、学生授業評価アンケートに関する分析方法が多様で、それはクレーム対応用の抽出ツールではなく、学生の傾向などを読み取り様々な事前対策に活用しようとしている。成城大学は、初年次教育の強化に特化して、キャリア支援や教務などとの連携により学生の教育支援と教員育成などを多角的取り組んでいる段階にあり、それに連動したシラバスの見直しをPDCAサイクルの一環としてFD項目として取り組んでいる。成蹊大学は、数々の試行の末、PDCAサイクル型の問題抽出と対処できるガバナンス構築を思案しており、教育改善を全学的に組み込むような大きな組織改革を進行している。また自由学習空間として、蔵書の多さと斬新な使い方(例えばゼミなど討論ができる仕様)ができるものも教育改善の一環として捉えていた。甲南大学は、FDに関して情報収集力が高く、FDに関する連携や交流に力を入れており、FDに関するWebやニュースレターによる情報発信が充実している。また『Student First』という教職員のキャッチコピーが徹底されて、校風と学生のレベルに合致したきめ細かい対応を心がけていた。

これらは一例であるが、各校とも教育改善に関して『FDの定義』に縛られることなく、『自校独自の教育改善』に取り組んでいいる段階に入っていた。武蔵大学としては実務的な情報交換のみならず、例えば東京4大学であれば、近隣なのでFD研修・セミナーなど一部共催することにより、FD活動の対応バリエーションを容易に増やすことが可能とと思われる。また連携や企画の共同開催、合同懇談会により、その責務から教育改善に関しての意識向上に繋がるStuff Development(SD)へと発展できる可能性も含まれているであろう。

今後の展望

武蔵大学は、教育環境としては小規模であることを活かしたこれまでの優れた教育活動や学生支援システムが数多くある。しかしながら具体的な良い事例の情報共有や連携機能がまだ未開発と言える。マンモス校などにはできない一人一人の学生のケアができる教育環境があるので、そういった情報の整理し内外に発信していくことによって、学生と教職員が一体となった協働により、唯一無二の学園づくりが可能になるであろう。

～具体的な展望課題～

・武蔵大学固有のFDポリシー構築（PDCAサイクル検証型）

・教育交流（FD連携）

・FD情報収集とその還元

・情報発信（Web、FD刊行物）

・全学的なFD活動に発展

・学内セクション間の連携と活用

・授業評価アンケートの内容（a.学習環境評価、b.授業評価、c.満足度・モチベーション評価）と活用（フィードバック）

・学生FDの位置づけとフィードバック

・FD ツールの開発（教材、情報発信、情報還元、分析ツールなど）

（文責：新宅）

3.FD 事業視察報告書

平成 23 年度　FD 推進ワークショップ

日　時）平成 23 年 6 月 25 日（土）13：00～19：00
主　催）私立大学連盟　教育研究委員会
場　所）TKP 東京駅日本橋ビジネスセンター
規　模）参加者 79 名、運営スタッフ 15 名
参加者）織戸大学事務局長

研修目的：FD 委員会事務局の長としての勉強・情報収集

研修報告：

1.　プログラムと目的

平成 23 年度法令化された教育情報の公表の一環として、私立大学における FD と SD の見える化の推進方策について教員と職員がともに討議し、大学の教育の更なる質向上のため FD 及び SD のリーダー育成の一助に資する研修とする。

＜プログラム＞

1）問題提起講演「見えない FD から見える FD へー職能開発の内部質保証システム構築を目指して」私立大学連盟　教育研究委員会委員　圓月 勝博氏　（同志社大学文学部教授）

2）グループ討議（テーマは 2 題、参加者の事前提出レジュメに基づく意見交換）

①　教育情報の公表の促進について

②　教育活動の質保証のための教職協働の取組

2.　講演概要

1）FD の近年の経緯

①　第一ステージ

平成 11 年「FD の努力義務化」、授業評価アンケート緊急導入、有志による活動

②　第二ステージ

平成 20 年「FD の義務化」、FD の専門家の登場、FD の理論化

2）第二ステージの課題

①　FD 専門家と一般教職員の格差：見えない FD（FD 活動の学内発信の不足）

②　大学と一般社会の格差：見えない FD（FD 活動の学外発信の不足）

③　FD の専門部署を持つ大学と持たない大学の格差

3）教育情報の公表と FD 関連領域

①　修学情報の一般公開は大学教育の質保証である

②　FD の理念＝大学教育の質保証

③　FD の目的＝大学の特色を活かして具体的に定義

4）第二ラウンドの認証評価＝内部質保証の体制の構築

3.　グループ討議での感想等

■　立命館大学の FD・SD 活動が教育 GP となっている

■　授業評価アンケートはシラバスに対する評価となっていることが望ましい
　　＊南山大学の授業評価アンケートが模範となる
■　FD 義務化に伴い教員は疲弊している、研究と教育の両立が難しい時代であるが、大学として FD・SD を協働で実行し、教育の質を向上させる努力が必要である
■　FD が低迷しているときは、大学統一での活動より、学部事業部制のごとく競わせることも一案である
■　松山大学では、父母への授業公開実施例あり

資料
■　平成 23 年度　FD 推進ワークショッププログラム
■　　同　問題提起講演レジュメ
■　　同　グループ討議レジュメ集
■　平成 23 年度　FD 推進ワークショッププログラム報告書

学生 FD サミット 2011 夏

日　時）平成 23 年 8 月 27 日（土）～28 日（日）
主　催）立命館大学教育推進開発機構・立命館大学学生 FD スタッフ
場　所）立命館大学衣笠キャンパス 敬学館
参加者）和井田 FD 実施委員長、織戸大学事務局長

視察ポイント
1.　学生主体の FD イベント視察
2.　FD への学生参画状況情報の収集

視察報告
1.　サミットプログラムの紹介
（開催趣旨）
■　大学教育の改善について全国の学生、教員、職員の三者が一体となって取組む学生主体のイベント。
■　各大学の取組み紹介や意見交換を行うことで、よりよい大学のあり方を考える。
（初日）
10：00－12：05　オープニング：6 大学の取組み紹介
12：15－13：45　アイスブレイク：学生・教職員が小グループに別れ交流
14：00－16：40　しゃべり場：「どうして大学に来ているの」をテーマとしたグループワーク
17：00－19：00　懇親会
（2 日目）
09：30－10：30　あんたの悩み解決したろか SP：学生 FD 活動に関する悩みをみんなで考える
10：40－13：30　テーマ別グループワーク：しゃべり場の続き

13：40－15：40　テーマ別発表：コンペティション形式
15：00－15：40　全体発表
15：40－16：00　エンディング

2.　参加者状況（主催者発表）
学生 198 名、教員 34 名、職員 36 名、その他 3 名　合計 271 名（大学 48 大学）

3.　視察の感想等

- 学生 FD 活動を実行する諸君は、大学生活に関し自律とロイヤリティの高さを感じる。このような学生を生み出すことが大学の FD 活動の目標ともいえる。
- 学生 FD 活動の形態は、学友会、委員会、サークル、プロジェクトなど様々であるが、学生単独の活動より大学組織と共同することがより成果を生むと考える。
- 北九州市立大は、昨年は学生自治としての参加にとどまったが、今回は大学側に働きかけ先生を連れての参加となったという例もあり。
- 京都文教大学の初年次教育『大学入門』（必修授業）の数コマは学生 FD が担当したり、岡山大学では学生向け講座「知らなければやばい大人のマナー」を学生 FD が企画し実施したなど、学生視点を活用している。
- 教職員の参加の立ち位置は、「学生が話しやすい雰囲気作りへの協力」であったが、すべての参加教職員にその姿勢が十分読み取れた。
- 小生の参加グループワークでは、学生リーダーに力がなく進行が澱んだが、学生たちが教職員に助けを求めることなく、協力し合ってワークの調整が図れた。

〈資料〉

- 学生 FD サミット　2011 夏（冊子）
- 各大学の学生 FD 取り組み紹介（冊子）
- 立命館大学　FDS　Report　2008vol.1
- 立命館大学　FDS　Report　2009vol.3
- 立命館大学　FDS　Report　2010vol.4
- 大阪大学「パンキョー革命・ひとこといちば・ワニバス」報告書　2010
- 京都文教大学　FSD　Magazine　2010 年度
- OTEMON PRESS　No.36　2011　June

（文責：織戸）

4.第二次中期計画のなかのFD活動（2011年度の総括と2012年度への展望）

【はじめに】

第二次中期計画が展開中であるが、大学の経営戦略のなかで、FD活動についても2項目にわたり重点事業として位置付けられている。FDの積極的展開、FD実施体制の整備、という諸項目である。この第二次中期計画を元に、平成23年度事業計画として、①FDの積極的展開、②FD実施体制の整備、③授業評価アンケートの検討、の3項目が立てられた。これは今後のFD活動にとっても重要な資料となるので、以下これらの3項目について、2011年度の総括と2012年度への課題というかたちで整理し、掲載することにした。

【1】FD（ファカルティ・ディベロップメント）の積極的展開

①目的・概要	『武蔵大学におけるFD活動の基本方針と課題』に基づき、平成23年度は、(1) FD研修会の充実、(2) 学生参加の企画と試行、を目的とした活動に取り組む。
②活動計画	①FD研修会を年3回開催する。(昨年度未実施分の繰上1回を含む) ②大学院FDとして、懇談会・研修会を企画する。 ③FD活動への学生参加の内容と方法を検討する。まずは学友会を窓口に懇談の機会を拓き、学生参加の「FDフォーラム」を開催する。
③実施結果	①7月に前年度のFD活動取り組みの報告と今後のFD活動の方向性についての研修会を、11月に名城大学の池田輝政氏を招いてFD/SD講演会を行った。 ②7月に人文科学研究科単独で、12月に経済学研究科と人文科学研究科と共同で、各研究科委員長と大学院担当FD実施委員が、院生にヒアリングを行った。 ③8月に立命館大学生主催のフォーラムを視察。3/13に学内研修会で学生を交えてのFDフォーラムを行った。
④分析	1) 大学院FDに関しては、23年度は院生へのヒアリングに留まった。院生が少ないため、授業評価を行うには難しい状況であるが、今後も評価方法に関して継続して検討していく必要がある。 2) 外部機関で実施される初任教員FD研修会の案内を行ったが参加者はいなかった。教員のFD研修について、検討が必要である。
⑤来期(2012年度)の計画	<FD（ファカルティ・ディベロップメント）研修と大学院FDの充実> ①FD研修会を年2回開催する。 ②外部機関で実施される初任教員FD研修会の参加率を上げる。 ③大学院FDとして、院生との懇談会（ヒアリング）を継続して行い、教育研究の充実を図る。 ④FD活動への学生参加として、学生団体に学外で実施されるFDフォーラムへの参加を呼びかけて意欲的学生の組織化に取り組み、学内的には、研修会の一環として学生参加のFDフォーラムを開催する。

【2】FD（ファカルティ・ディベロップメント）実施体制を整備する

①目的・概要	『武蔵大学におけるFD活動の基本方針と課題』に基づき、FD（ファカルティ・ディベロップメント）実施体制を整備する
②活動計画	①担当事務の位置づけを含め、組織体制の検討・整備をすすめる。 ②FD調査員の業務委託を行って、FD活動の先進大学を視察し、組織・体制、授業評価方法、研修内容、使用ツール等に関する調査を行う。 ③FD調査員の調査報告会を開催して問題点を共有する。また、調査報告に基づく提言をまとめて学長に提出する。
③実施結果	①6月にFD業務が庶務課から企画課に移管され、学長直下で遂行されることによる大学全体としてのFD強化が図られた。 ②10月にFD活動の先進大学である立教大学を訪問して、取組状況・体制組織・使用ツール等の調査を行い、実施委員会で検討を行った。 ③平成23年度後期（12月より3月まで）に、FD調査員と業務委託し、以下の調査を行った。 1）授業アンケート評価の調査及び分析 2）報告書等の調査、企画、執筆 3）FD研修会の調査、企画立案 4）教育改善ツールの調査 5）FD活動における職員・学生の関与状況の調査 6）FD実施体制の実態調査と組織体制の在り方の調査。 ④FD調査委員より調査報告書が提出され、FD実施委員および執行部に対して調査報告が行われた。
④分析	FD調査員を導入することで、大学教育改善全般を視野に入れたFD活動のデザインを探究する可能性が生じた。その意味で、FDの実施体制が整備され、その成果の端緒が開かれつつあるといえる。しかし、教員と職員の間に位置付くFD調査員の募集は、当初応募がほとんどなかったため、調査開始が予定されていた10月1日には間に合わず、12月中旬からの開始となった。これは、業務委託という勤務形態と、想定していた人物像（ポスドク）とのミスマッチが一因であると考えられるが、次年度も調査業務を依頼することがあるならば、募集方法・勤務形態を再検討する必要がある。
⑤来期(2012年度)の計画	①FD調査員の調査報告と提言を受け、FD実施体制の検証を行う。 ②FD委員会とFD実施委員会の二重体制になっている点の是非を検討し、より機能的で効率的な実施体制の構築を図る。 ③高等教育等研究者による調査業務を継続する場合、勤務形態、雇用期間、募集方法等を再検討する。

【3】授業評価アンケートの検討

①目的・概要	授業評価アンケートの実施体制の整備として、(1)アンケート方法の試行、(2)規程等の整備、(3)全学版FD活動報告書の作成、(4)アンケート結果のフィードバック方法の検討、に取り組む
②活動計画	①学生による授業評価アンケートのオンライン化や回数増加の試行をする。 ②FD活動報告書の全学版を作成する。 ③アンケート結果の学生へのリプライ及び授業にフィードバックする仕組みを検討する。
③実施結果	①学生による授業評価アンケートのオンライン化に関して、昨年度のWebアンケート評価検討部会による検討について、大学協議会で次のとおりの報告を行った。(平成23年度第1回大学協議会B-3報告) ・3Sの機能を活用したアンケート方式は当面見送りとする。 （事由：最小の費用でのアンケート実施が期待できるが、IT科目以外は授業中に回答できないため回答率の低下が懸念されること、匿名性が保てないため正しい評価がされない恐れがあることによる。） ・回数の変更は行わない。(事由：現行のOCR方式を継続するため) ②授業評価アンケートの厳正な実施を目的とした『武蔵大学「学生による授業評価アンケート」取扱内規』を制定した。また、自由記述欄に書かれた誹謗中傷に対して、学部長によるフィルタリング処理を開始した。 ③7月に、平成22年度のFD活動報告と授業評価アンケートの全学部集計結果を掲載した『武蔵大学FD活動報告書 2010(平成22)年度版』を発行した。 ④学生へのリプライ方法として、次年度のFD活動報告書をWebで公開することがFD実施委員会で了承された。また、アンケート結果を授業にフィードバックする仕組みとして、自由記述欄に書かれた施設関係のクレームをまとめ、改善の提言を行った。
④分析	アンケート結果の利用について、次年度は授業へのフィードバック方法を引き続き検討するとともに、科目別集計結果のリプライについて、立教大学で導入している「所見票入力システム」のようなツールを導入できるか検討を行う。
⑤来期(2012年度)の計画	①アンケートの内容・対象科目について、平成23年度に教員から寄せられた意見を踏まえた改善を行う。 ②FD活動報告書をWeb公開する。 ③科目別結果を学生にリプライする方法を検討し、リプライ実施の手はずを整える。 ④アンケート結果を授業にフィードバックする仕組みを試行する。

（文責：和井田）